

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

- 01 10代とともに ～目の前のことに100%の力をそそぐ
- 04 2026 夏の交流 体験をとおして学ぶ異文化
 - ・ ニュージーランド交流、北米交流、オレゴン国際キャンプ、韓国交流
 - ・ 海外青少年交流受入れ、韓国青少年受入れ 引率者より
- 09 第38期ラボ高校留学
- 10 東京言語研究所 公開講座
 - ～メタフォリカル・マインドとクリティカル・マインド
 - ラボ・インターン紹介
- 11 Go Ahead! ～木本侑輝氏
Information



馬場歌子 中2（東京都 岡村絵深P）

「からくないもん！」

小さいとことパーティにいった。スイカに辛い粉（Tajin）
を大量にかけていた!! ——アメリカ・アイオワ州



10代とともに

山下良美

Yamashita Yoshimi

東京出身。サッカー審判員（国際主審、Jリーグ審判員）。2012年に女子1級審判員の資格取得。2015年、FIFAの国際審判員に選出される。全国高等学校サッカー選手権大会、AFCカップなどでも審判員を務め、2021年、Jリーグ史上初の女性主審となる。



目の前のことに 100%の力をそそぐ

審判員になったきっかけや試合へのむきあいかなど、山下さんがたいせつにしていることを教えてくださいました。審判員のことだけではなく、将来を考えるうえでたいせつなメッセージを数多くいただきました。

サッカーに出会ったのは幼稚園のころ。2つ年上の兄がやっているのを見て、自分もやりたいと思い、はじめました。このときからサッカーが好きで好きで、「ずっとサッカーをやりたい」という思いを抱いたまま、中学生まで夢中でボールを追いかけていました。

しかし高校ではバスケットボール部に入学しました。当時、女子サッカー部のある高校というのはあまり多くなく、サッカーは大好きでしたが、部活のことで進路を狭めたくないと考え、高校はサッカーにはこだわらず進学しました。それでも部活動はやりたかったので、バスケットボール部に入学したということです。「早弁」をして、お昼休みは練習。放課後もみっちり練習があったので、青春時代の思い出というと、サッカーではなく、バスケットボールをしていた記憶がまず思い浮かびます。部活ではとても良い仲間に出ることができ、とても充実した日々を送りました。

でも、そんな日々のなかで、自分の思いを再確認することがありました。放課後、教室から体育館にむかうのですが、その途中、校庭の男子サッカー部の練習が見えます。すると私の視線は、バスケットのドリブルの音が聞こえる体育館ではなく、校庭のほうにいつ

ているということに、ある日ふと気づいたのです。「ああ、私はやっぱりサッカーがやりたいんだ」と感じたできごとでした。なので、大学ではまたサッカーをやることにし、4年間、ディフェンス専門のボランチとしてサッカーに没頭していました。

当時は、女子のプロサッカーリーグはありませんでしたし、自分の実力のこともあって、サッカー選手として生活していこうとは思っていませんでした。それよりも、楽しいサッカーを生涯続けたいという思いが強かったです。そしてこのときにはまだ、サッカー審判員への興味はまったくありませんでした。

まず、やってみる

しかし、転機は突然おとずれます。大学の先輩に「審判やりなよ」と誘われ、先輩の言うことには従うしかないと、あれよあれよという間に審判をやることになりました。ですので、はじめから審判員になりたくてなったのではないのです。でも、ふり返ってみると、そういうチャンスをもたらえてほんとうに良かったと思っています。そして、もともと興味があったわけではなかったけれども、誘いを断らずに挑戦してみたことも大きかったと思っています。私の場合は「やってみたこと」が今につながっていますが、やってみた結果、

仮に「やっぱり嫌だな」と思ったとしても、「嫌だな」と気がつけることも良いことなので、なんでもまずやってみるということがだいじなんだと思います。

審判をやりはじめると、「あれもできなかった、これもできなかった」と悔しいことがいくつもありました。そういうことが諦められない性格なので、「次はこれをできるようにしよう」という思いが審判員を続ける糧になっています。今でもあのときに誘ってくださった坊菌真琴さんとは、日本サッカー協会の審判員として一緒に活動しています。

つねに Ready

私がメディアでとりあげられるときに、よく「女性初の」ということばがつきます。はじめにそう言われたのは、2019年の「AFC アジアカップ」で主審を担当したときです。この大会の主審に任命されるには、「Fitness test」に合格しないといけません。このテストは「男性の試合を担当するための基準」と、「女性の試合を担当するための基準」にわかれていて、男性の試合を担当するための基準のほうが厳しいものとなっています。「AFC アジアカップ」というのは男性の試合なので、このテストに合格するために、準備しておく必要がありました。突然参加することになった

10代とともに



2019年3月の「AFC 開催 Men's Fitness test@MAS」で、女性で合格したのは日本の審判員4名だけでした。私たち日本の審判員は、いつくるかわからないこのようなチャンスにそなえて、しっかりと準備をしていました。そしてそのことが、結果としてあらわれたのです。4名の合格をとても誇らしく思ったことを覚えています。今は、「女性初の」ということばで紹介されますが、女性の審判があたりまえになるように、これからもしっかりと準備をしておいて、突然やってくるかもしれないチャンスをつかみたいと思っています。

そして私は、「爪痕を残す」ことも意識しています。それは、いかに自分を知ってもらうかということです。たとえば3級審判員の資格を取得するための試験では、「クーパー走」という科目があります。これは、12分間で2,000m以上を走るという持久力テストなのですが、時間内に3,000m以上走ることができると、発表の際に「起立してください」と言われ、参加者から「おめでとうございます」と声をかけてもらえるんです。なので、絶対に3,000m走りたいと思い、それを目標にしました。こうやって、自分をアピールできるチャンスは逃さないようにしています。

思いを伝える

審判員のイメージといえば、「選手がファウルをしたら笛を吹いてイエローカードを出す」という姿を思い浮かべるとと思います。でも実際には、コミュニケーション力、伝える力がとても大切です。審判の思いが伝わらないと、うまく試合をコントロールすることができなくなるからです。ですから私たちは、ことばだけではなく、表情やジェスチャー、立ち姿や笛すべてを使って相手にこちらの思いを伝えます。審判が伝える相手というのは、ファウルをした選手だけではなく、22人のフィールドプレイヤー、ベンチのコーチや控えの選手、また時には5万人を越える

こともあるサポーター、これらすべての人に思いを伝える意識でピッチに立っています。

国際試合では、選手に日本語は通じません。基本的には英語でやりとりするのですが、英語が伝わらない選手もいます。しかし、深刻なファウルのときは厳しい表情で、その選手のところまでわざと一気に走り寄り、大きなジェスチャーで表現すれば、こちらの思いを伝えることができます。たとえことばがわからなくても、こちらの思いが伝わればそれで良いのです。相手にどのようにすれば伝わるのかをつねに考えながら審判をしています。審判員のなかには英語が得意でない人もいます。しかし、そういう人のほうが、選手に思いを伝えられるということもあるのです。私も、その人のやり方をまねしたいと思いますが、なかなかまねできない。表現力や伝える力が強く、自分の思いを一生懸命伝える姿勢が相手に伝われば、ことばの壁も乗り越えてしまうものだと感じています。

たとえばワールドカップのような大きな大会だと、選手たちと同じように、審判員もひとつのチームとして動いています。ごはんも一緒に食べますし、大会中のトレーニングも、試合後のふり返りも映像を見ながらチームでおこないます。そして試合にむかう仲間には「いってらっしゃい」とか、「ワールドカップおめでとう!」とか、声をかけあいます。この共同生活のなかでも、コミュニケーションをとることが重要です。

チームプレイは選手だけではない

試合のなかでは、しばしば重要な場面で判断をすることがあります。でも、「ここは重要な場面だから」と考えている余裕はありません。判断することがものすごくたくさんあり、状況も目まぐるしく変わっていきます。すべての判断が試合結果を左右するので、良い意味で余裕がなく、判断する際に不安を感じているひまはありません。不安を残していると、次の

プレイの判断にも影響が出てしまうので、気持ちのコントロールもとても重要な要素です。

しかし、たとえばペナルティエリア内でのファウルに対して笛を吹いた際、ファウルをした選手が、納得できずつめよってくることがあります。試合全体のコントロールをするために、もちろん主審が不安な顔をするわけにはいきません。でも内心「もしかしたらファウルではなかったかも」という疑念がよぎることもあります。そんなときには、顔につけているコミュニケーションシステムで「今のファウルじゃなかったですかね?」と口に出すことがあります。じつは試合中、審判チームのメンバーは無線でやりとりができるようになっているのです。私がみんなに問いかけるとすぐに「いや、絶対ファウルだよ!」と励ましてくれると、とても心強く、しっかりと気持ちを切り替えて試合を続けることができるのです。

審判員としての生活

サッカーのシーズン中は毎週、試合を何らかのかたちで担当しています。主審、第4の審判、VARなど、さまざまな役割があります。試合の前日にスタジアムの近くに移動して、夜の試合の場合は、なるべく遅くまで寝ているように心がけています。午前10時頃まで寝ているときもあるくらいです。試合の前には、同じ試合を担当するほかの審判と一緒にスタジアムへむかいます。

試合の前準備として、対戦する両チームの直近2試合の映像を見て、自分の動きをイメージします。それから、審判員は絶対にケガをしてはいけけないので、そこは気をつけて生活しています。なので、好きなサッカーをプレイできないことが、少し残念です。

海外に行くと、その国のさまざまな料理が用意されるのですが、私は試合前にはパスタを食べたいので、自分でパスタを持って行って、現地で茹でたものを食べています。1試合

10代とともに

でおよそ11kmくらいは走る必要があるの、しっかりと食べておくことも重要なことですね。

何を信じるか

サッカーをプレイする選手は、ミスをすれば厳しい意見を言われますが、素晴らしいプレイで賞賛されることもあります。しかし審判は、賞賛されるということはあまりありません。「あたりまえにやる」ということがとてもだいじです。私は「すごかったね」と言われたいとも思っていないで、試合がぶじに終わることがいちばんの喜びですし、達成感があります。

SNSがこれだけ浸透している世の中ですから、私の試合中の判定に対して、ネガティブな意見を発信する方もいます。そういう投稿を目にすると、やはり落ち込んでしまうときもあります。そんなときには、身近な、自分に直接届く声をだいじにしています。直接届

く声は、私を応援してくれるものだったり、厳しい意見であったとしても、しっかりたいせつなことを伝えてくれます。そういう声をだいじにしていくことで、「外の声は外の声」と自分から切り離して考えることができるのです。客観的に「たしかにそういうふう思うよねー」と、軽く捉えることもありますね。

審判員の仕事は、自分のメンタルを良い状態で維持するのがむずかしいです。けれど「自分が何を信じるか」をしっかりともちつとで、続けていけると思っています。ふり返ってみると、子どものころから、嫌なことは忘れてしまう性格だったと思います。テストに落ちたり、これまでさまざまな挫折もあったりしたのですが、そのどれもが「経験して良かったな」と思えることばかりです。小学校のときに所属していた男の子のサッカーチームでは、女の子だからという理由で、チームメイトから少し冷たく対応されることがありました。しかしそれも、ぜんぜん嫌なもの

はなく、楽しい思い出になっています。

10代へのメッセージ

みなさん、これからいろいろなことにむきあっていくと思います。私がたいせつにしているのは、あまり遠い将来のことを考えるのではなく、目の前のことに100%力をそそぐということです。私自身も、次の試合でいかに自分のすべてを出せるかということだけを考えています。そうしていくことが、次の自分のステップにつながると信じているからです。今はまだ、将来やりたいことが見えていない人もいますが、私も大学時代はどんな道に進むかまったく決めていませんでした。突然誘われたサッカーの審判員をやってみて、1試合ずつしっかりとむきあってきた結果が今につながっていると思います。今やっていることが次につながると信じて、みなさんもがんばってほしいなと思っています。

(文責：編集部)

インタビューを終えて

[取材協力]

岡山県、山口県、徳島県、高知県のラガ会員

後藤直美パーティ

●大下温人(高2) とくに印象に残ったのは、「次の試合でより良くなりたいたい」という気持ちをもち、目の前にある目標をひとつずつ達成しながら進んできたというお話です。私は将来について考えるとき、最終的に何を仕事にするのか、どの道に進むのかを早く決めなければいけないように感じる場合があります。しかし、山下さん自身も最初から審判員をめざしていたわけではなく、目の前にきた機会に挑戦し、その時々でできることに全力で取り組んだ結果、今につながっていると知り、将来の考え方が少し変わりました。また、私はこれからサッカーに関わり続けたいと思っていますが、どのようなかたちで関わるのかはまだ決まっています。今回の話を聞き、サッカーには選手や審判だけでなく、データ分析や映像、ピッチの管理など、ほんとうにたくさんの人が関わってひとつの試合をつくっていることを知りました。

坂口朋子パーティ

●日吉若菜(高3) 世界的に活躍するときのコミュニケーションについて、言語もたいせつだが伝えたいという思いがたいせつ! 英語が苦手な人ほど表現などで伝えようとしていると聞き、国際交流で自分もそんな感じだったなと思い出し、ラボでやっていることはこういうことなのかなと感じ、たいせつにしていこうと思いました。

鈴江晶子パーティ

●大島弘暉(中1) 山下さんが審判員をしている試合中や、生活のようすなどについて教えてください。ぼくは、女性だから困ることはあるのかと聞いたのに対して、山下さんは困ることはないと言っていたのが意外でした。

宮地香奈パーティ

●宮地聡輔(中3) 山下さんの幼少期からの「生き方」や「人生観」、審判員という立場ならではの多面

からの視点などたくさん学ぶことができました。なかでもとくに印象に残ったのは「爪痕を残す」という山下さんのポリシー。これにとっても惹かれました。自分も一人間としての存在感をあらわすことだったり、十人十色の十一色目になりたいという思いがあるなかで「爪痕を残す」ということばにとっても共感しました。今回のお話で自分の生き方について見つめ直す場面がたくさんありました。何事にも恐れず「つねにReady」の姿勢で、機会は二度とおとずれないと思い、チャンスを確実につかみにいき爪痕をしっかりと残す。このスタンスで自分という存在を確立し、いつチャンスが訪れてもいように日々の積み重ねというものをたいせつにしていきたいと思います。

●河邑拓真(大学生年代) 審判員というピッチ上のもっとも近い場所から見てくるサッカーの新たな魅力や、主審ならではの多角的な視点について深く学ぶことができ、終始胸が高鳴る思いでした。お話のなかでとくに深く心に残っているのは、ピッチ上におけるコミュニケーションの本質と、極限状態での判断力についてです。試合中に生じる選手同

士の小競り合いへの対処として、「言語そのものの正確さ以上に、その行為が望ましくないものであると選手自身に伝えることが重要であるため、表現の形式は柔軟であって良い」という趣旨のお話を聞き、型にはまらない本質的な対話力に感銘を受けました。

吉兼和恵パーティ

●児玉智紀(高2) サッカーの審判は、審判をするにあたっての勉強、それに加えて試合中走り続ける体力が必要であり、女性審判が男性の試合を担当することは体力面でたいへんなことを知りました。驚いたのは英語がわからない選手には通訳をすることなく、ジェスチャーや表情で物事を伝えるということです。これまでラボキャンプなどでユースにジェスチャーも使って話していたけれど、表情が加わればもっと心が通じあうのかなと思いました。山下さんはサッカーが好き、というところから審判という職にたどり着いていて、自分も「好き」をたいせつにしていき、将来にどうつながるのか楽しみます。

[取材日] 2026年7月22日

2026
夏の交流

PHOTO速報

体験をとおして学ぶ異文化

ラボ国際交流は10代の若者がおとなになる入口としての「ひとりだちへの旅」、そして「体験をとおして学ぶ」「異文化理解」をテーマにしています。楽しい経験だけではなく、ときとして異文化の壁にとまどうこともある国際交流。さまざまな違いを自ら乗り越え、より良い人間関係を結ぶ努力こそが、ひとりだちへの大いなる一歩となります。今夏の各プログラムをようすを写真でご紹介します。

ニュージーランド交流

日程 7/22~8/14
参加者 73名



学校に通ったよ!



Japan Day で日本文化紹介



北米交流 (アメリカ、カナダ)

日程 7/21~8/19

参加者 310名



同じ景色を一緒に見た



仲良くなるきっかけはいろいろ



オレゴン国際キャンプ

日程 7/21～8/12

参加者 21名



プログラム

●ハイイク、動植物観察、カヌー、寝袋泊、博物館見学など多彩な自然体験、
野外活動プログラム

●オレゴン州と周辺州の中高生と交流できるプログラム



大自然を満喫！

韓国交流

日程 7/22～7/30

参加者 15名



一緒に過ごした時間



海外青少年交流受入れ

家族でできる国際交流のひとつ、海外青少年の受入れプログラム。家族の一員として受け入れるなかで、相互に異文化を体験する機会となります。今夏も受入れ家庭で、パーティで、キャンプで、さまざまな交流がうまれました。

北米青少年日本語研修

日程 6/12～7/10
参加者 18名

北米青少年

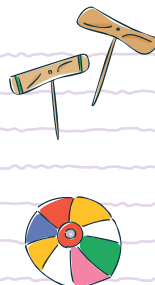
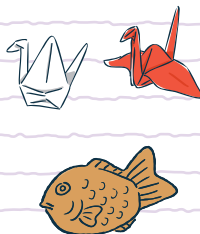
日程 7/10～8/6
参加者 35名

ラングブリッジ日本語研修

日程 7/11～8/12
参加者 17名



Welcome to Japan



日本語研修プログラム



いろいろ体験したよ



日本で体験したこと、驚いたこと

- Some of my favorite memories came from going on a bike ride with my brother.
- For the most part I just went with them on errands and small trips but I thought it was amazing to just be a part of their normal life.
- I didn't know that they don't say bless you after someone sneezes.
- I hadn't known about how you stand on the left and walk on the right for most escalators.

韓国青少年受入れ

日程 8/4~8/13

参加者 13名



韓国青少年受入れ 引率者より

☆… 12名の韓国青少年を引率して来日した韓国ラボのCHUNG KWANGMI先生。日本でのホームステイの思い出や、子どもたちを送り出す思いを教えてくださいました。



안녕하세요. 2026년 한국・일본 라보 국제교류 인솔자 정광미입니다.

이번 교류는 '우리는 라보로 하나이다'라는 것을 마음으로 느낄 수 있었던 뜻깊은 시간이었습니다. 라보 캠프에서는 말이 통하지 않아도 송버즈와 테마를 통해 하나가 되었고, 홈스테이에서는 호스트 가족들과 일상을 함께하며 언어와 문화의 장벽을 넘어 일본에 또 하나의 가족을 만날 수 있었습니다.

이번 교류가 라보 친구들에게 더 넓은 세상으로 나아가는 소중한 경험이 되었으리라 생각합니다. 이번에 맺은 인연이 앞으로도 오래 이어지기를 바랍니다.

감사합니다.



【訳】

こんにちは。2026年韓国・日本ラボ国際交流の引率者、チョン・グワンミです。

今回の交流は、「私たちはラボでひとつ」ということを心から感じることができた、とても有意義な時間でした。ラボキャンプでは、ことばが通じなくてもソングカードやテーマ活動を通して、ひとつになることができました。また、ホームステイではホストファミリーと一緒に日々の生活を過ごし、ことばや文化の壁を越えて、日本にもうひとつの家族ができたように感じました。

今回の交流が、ラボっ子たちにとって、より広い世界へ踏み出していくための貴重な経験になったことと思います。今回結ばれたご縁が、これからも長く続いていくことを願っています。

ありがとうございました。

2025-2026 第38期ラボ高校留学 帰国しました

アメリカ・カナダに留学していた高校留学生 13 名が、6～7月にかけて帰国しました。帰国前に受入れ団体ごとに Evaluation Meeting をおこない、10 か月の留学生生活を振り返りました。留学生活のようすをファイナル・レポートから抜粋してご紹介します。

Q. おもしろかった授業は？

- ・ Entrepreneurship (起業家精神)
- ・ Architecture (建築)
- ・ Forensics (法科学)
- ・ Culinary (料理研究)
- ・ Cosmetology (美容)

日本の高校ではあまりないような授業もいろいろあったよ。



Q. 準備して役に立ったことは？

- ・ 日本での勉強をまじめに取り組む。英語だと難しくても、一度日本で習ったことがある内容だと頭に入ってきた
- ・ 英語の文法をひたすらに勉強したこと
- ・ 日本や地元について説明できるようにしておくこと。日本に興味がある人に話すネタにもなるので、友だちづくりにもたいせつなことかなと思う



- ・ 自分と自分の家族についてのアルバム作り。みんな楽しんで見てくれた
- ・ 見えたものをすべて英語で言うてみる練習

Q. 苦労したことは？

- ・ 最初はぜんぜん英語が聞き取れなかったし、思っていることを話せなかった。毎日少しずつでもリスニングを上達させたいと思い、家に帰ってホストファミリーとも積極的に話すようにした
- ・ 一度、心の底から英語とアメリカを嫌いになったことがありました。学校に行って友だちに会っても、英語を話さなければ何もできないので、それもまた憂鬱になってしまいました。でも、心の中で思っていたことを話していくうちに自分のなかにあったプレッシャーがなくなり、気持ちが楽になりました。そこから英語に対しても、何に対しても樂觀的になることができるようになったと思います
- ・ 友だちをつくること。日本ではすぐに仲良くなれるが、グループでかたまっていたので、話しかけたり、一緒に遊んだりしても仲良くなるのに時間がかかった。諦めずにいろんなイベントにその子たちと一緒にいたり、話しかけたり、廊下ですれ違ったときや授業のときは話ができてよかった。また、まわりにとらわれず、ひとりで自然を満喫する時間もだいじにした



今後、留学に挑戦するみんなへのメッセージ

- ・ 不安に思う気持ちはまったく悪いことじゃない。だいじなのは自分からどれだけ頭を突っ込めるかです。自分は怖くてできなかったことがいくつかあって、それを今になって少し後悔することがあります。そうならないためにも楽しそうな提案にはYESと尝试してみてください!!
- ・ 留学生生活をどんなふうに過ごすかは全部自分次第です。留学して何かが急激に変わるわけではありません。でも、英語力や物事の考え方、違う環境におかれたことではじめて知ることなどが、これからの人生に大きくプラスに働くことは間違いありません。どんな過程も楽しんでみてください

ASPECTグループの Evaluation Meeting には、第36期ラボ高校留学に参加し、現在はアメリカの大学に留学中の先輩も参加してくれました。

それぞれの留学生活、これからどうしていきたいかなど、留学直後の熱く語る姿がとても印象に残っています。挑戦の一步が踏み出せるラボだからこそ手に入れた「自分の武器」をもとにがんばった自分の留学生生活を思い出しました。留学を考えているみなさん、まずは自分にできる一步を踏みだしてください!

北村真悟 大学生年代 (山梨県 万行恭子P)

2026-2027 第39期ラボ高校留学 出発しました

第39期ラボ高校留学生 7名がアメリカ、カナダへ出発しました。研修後、ホストファミリー宅から現地の高校に通う留学生活が始まっています。



メタフォリカル・マインドと クリティカル・マインド



楠見 孝

1959年生まれ。京都大学国際高等教育院特定教授、名誉教授。学習院大学文学部心理学科卒業、同大学院博士課程中退、博士（心理学）。

専門は認知心理学。著書に『なつかしさの心理学』（誠信書房）、『批判的思考－21世紀を生きぬくりテラシーの基盤』（新曜社）、『高校生のための心理学講座－こころの不思議を解き明かそう』（誠信書房／分担）、『心理学って何だろう？－四千人の調査から見える期待と現実』（誠信書房）、『メタフォリカル・マインドー比喩的思考の心理学』（有斐閣）など。

私たちは毎日、「時間が流れる」「議論に勝つ」など多くの比喩を使っています。これは、ただのことばの飾りではありません。目には見えない心の動きや、とらえにくい社会のできごとを、身体感覚や身近な経験に重ねて理解するための仕組みです。この講座では、比喩によって考え、感じ、行動する心の働きを「メタフォリカル・マインド」として紹介しました。

前半では、比喩を理解する仕組みを心理学と言語学の研究からみていきました。「心は沼だ」のような隠喩は、ふたつのものの類似性を手がかりにします。一方、「ホワイトハウス」でアメリカ政府をさすような換喩は、知識や経験における近い結びつきを手がかりにします。さらに、「甘い音」「柔らかい色」のように別の感覚であらわす共感覚表現や、「気分が沈む」「怒りが爆発する」といった感情表現を取りあげ、感覚や気持ちをどのようにことばにするのかを考えました。そして、「愛は戦いである」「病気と闘う」のように、あるものごとを別

のものごとにたとえる概念比喩が、私たちの経験や行動の意味づけをどう変えるのかを取りあげました。

後半では、その比喩の力を批判的に問い直す「クリティカル・マインド」について考えました。比喩は理解を助ける一方、ある見方を強め、別の見方を隠すことがあります。たとえば病気との「闘い」の比喩は、人々を励まして行動を後押しすることもあるれば、困難と長くつきあう視点や支えあいのたいせつさを覆い隠すこともあります。だからこそ、「この比喩は何を目立たせ、何を隠すのか」「別の言い方はできないか」と立ち止まって考える姿勢が欠かせません。

この講座では、比喩を単なる言い換えではなく、学びや判断、人と人との関わりを支える心の働きとしてとらえました。比喩で豊かに考える力と、冷静に問い直す力を、分断された社会に橋をかけるためにどう生かせるのかを、最後にみなさんと考えました。

2026
2027年度

ラボ・インターン紹介

新しく2名のラボ・インターンが
やってきました！

James Deaton

ジェイムズ・デイトン



出身：アメリカ オレゴン州

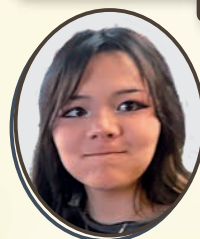
年齢：19歳

趣味：旅行、料理、ファッション、
ビジュアル系、マンガ

配属：2026年10月～2027年1月 中部支部
2027年3月～2027年8月 東京支部、千葉支部

Rachel Buck

レイチェル・バック



出身：アメリカ テネシー州

年齢：19歳

趣味：音楽、絵を描くこと、ベーキング、ガーデニング、クラブ
ト、アニメ

配属：2026年10月～2027年1月 北関東信越支部
2027年3月～2027年8月 関西支部

心がワクワクするほうへ 進め！

木本侑輝

株式会社 DeNA
川崎ブレイブサンダース
営業部



私は中学1年生の夏にラボ国際交流に参加し、アメリカ・フロリダ州にホームステイをしました。国際交流への参加は小学校高学年のころからずっと楽しみで、寝ている間に国際交流に参加している夢を見ることもありました。しかし、いざ参加してみると、ほとんど何を言っているのか聞き取れませんでした。それでも、『すてきなワフ家』のなかにてでくるセリフをMomから言われたときは「ホントにこう言うんだ!」と感動したのを覚えています。



アメリカはことばも文化も価値観もスケールも全部が日本とは違い、当時の自分にとっては驚かされることがたくさんありました。しかし、その違いを「おもしろい!」と感じられたことが、いまの自分にいきていると思います。「自分と違う」こと、「自分が知らない」ことを受け入れたうえで、理解しようとする姿勢が身についたと感じます。

ラボ国際交流での経験を経て、海外に強い興味を抱くようになり、進学先の高校も修学旅行で海外に行けるという理由で選びました。修学旅行ではオーストラリアを訪れ、魅了され、大学生になったらまた来たいという想いを抱きました。そして大学を1年間休学してワーキングホリデーで再びオーストラリアへ行き、ツアーガイドの仕事を経験しました。その経験から、「旅」がもつ可能性に魅力を感じ、旅行会社に就職しました。

在職中は、法人向けの団体旅行を中心に旅行プランを企画し、各地の魅力や旅の魅力を感じてもらえるよう取り組んでいました。そのなかで担当していた顧客に現在の勤務先であるプロバスケットボールチームがあり、深く関わっていくうちにスポーツビジネスに惹かれました。地元のチームであったこともあり、まったく経験したことがないバスケットボールという競技でしたが、思いきって転職を決意しました。



そして現在は、「スポンサー営業」という役割を担っていて、日々の業務のなかで、ファン、スポンサー、地域の人びとに愛されるクラブになれるよう奮闘しています。

いま思えば、そういった決断力や自身が目ざす姿を考えることは国際交流から学んだことなのではないかと思っています。



ラボっ子のみなさんも、ぜひラボでいろいろな経験を積んで、自分が好きなこと、楽しいと思えることをひとつでも多く見つけてみてください。それが未来の自分へのヒントになるかもしれませんよ!

きもと ゆうき
(神奈川県・川上優香パーティ OB)

Information

国際交流親善事業

■第40期ラボ高校留学プログラム

◎選考試験

- ・ 9月 ELTiS2.0 試験 (オンライン)
- ・ 10月 ELTiS2.0 試験 (オンライン)

◎面談

- ・ 10月18日 オンライン (首都圏以外)
- ・ 10月25日 対面 (首都圏)

■海外からの青少年受入れプログラム (予定)

◎ニュージーランド

(青少年14名+引率者1名)

日程: 12月12日対面

～2027年1月3日集合・帰国

◎第40期ラボ・インターン (2名)

日程: 9月末～2027年8月中旬

■S4-H Professional Development Trip

日程: 10月17日～19日

4Hのコーディネーター8名が日本でのホームステイ (予定)

■理事会・評議員会

日程: 11月19日

上半期事業報告会

東京言語研究所

■理論言語学講座秋期集中

日程: 10月10日(土)～12日(月・祝)

講師: 西村義樹 (東京大学名誉教授)

課目: 認知言語学II

講義形式: 対面 (先着10名) とオンラインの併用

■理論言語学講座後期

※前期からの開講講座2講座に加え、新たに8講座開催

日程: 10月5日から10週間、各講座
19:00～20:40

講義形式: オンライン

◎東京言語研究所の講座についてはウェブサイトをご覧ください

<https://www.tokyo-gengo.gr.jp/>